平成２２年６月発行　　№２５

子どもと造形

児造研ニュース

児童造形教育研究会機関紙
編集・発行人　　長　尾　宏　一
事務局　〒111-0051
台東区蔵前３－20－２ クレパスビル内
TEL　03(3862)3937

第 34 回児童造形教育研究集会

「 図工で培う子どもの力　－図工の評価で子どもの何を見るのか？－ 」をテーマに

児童造形教育研究会　会長　　長尾　宏一

今年の3月、卒業式前日に6年生たちから感謝の手紙を綴ったものをもらいました。その中に「先生に誉められたのが嬉しくて、図工が好きになりました。」「先生にアドバイスをもらって、いい作品ができて嬉しかったです。」といった言葉を書いている子が多くありました。子どもたちの活動の様子を見ながら声を掛け、話を聞くように心掛けたことがよかったのかなと、子どもたちとの5年間を振り返りました。

「評価」は、子どもをやる気にさせるものでなければならないと思います。子どもが表現する過程において発揮している力を見逃さず、その時に評価してあげることが何より大切ではないでしょうか。子どもは、認められることにより自信をもち、さらに資質・能力を高めていきます。一方、力を発揮できないでいると評価する子がいたとしたら、力を引き出すための指導をしてあげることができます。その指導によって滞在していた力とやる気を呼び起こすことができるのです。いわゆる「指導と評価の一体化」です。

題材のねらいに合わせて、子どもが発揮した力を伝えるためには、記録することも必要です。しかし、通知表や指導要録につけるために評価する、いわるゆる「評価のための評価」になってはいけません。できあがった作品も活動の最終過程として評価する必要はありますが、仕上がりがよくなくても表現の過程で発揮した力を評価してあげなければなりません。

では、子どもたちの活動のどんなところを見て評価すればいいのでしょうか。

その答えは、児造研の夏研に参加してもらい、一緒に見つけられればと思います。

夏研では、本研究会メンバーが指導した児童の活動の様子を撮ったビデオを見ながらパネルディスカッションを行い、子どもの活動の何を見ればいいのかを探ります。また、実技研修においても、評価につながる活動のポイントや評価の工夫を提案できればと考えています。

夏研で皆様にお会いできることを本会メンバー全員が楽しみにしております。お子様も一緒にご参加ください。子どもたちが一緒に実技をすると、子どもの表現のよさや滞在している資質・能力を実感することができるので、大歓迎なのです。

今年のテーマ
「 図工で培う子どもの力 ―図工の評価で子どもの何を見るのか？― 」
によせて・・・実技研修会にむけてスタッフからのメッセージ

子どもの「つくりだす喜び」がひろがるために

安倍啓斎

２年生で全紙の画用紙にチョークやコンテパスを使って「ぼかし遊び」をしたときのことです。

どのグループも画用紙の四つの隅からゆっくりとそれぞれの活動が始まりました。ぼかし網で粉をつくっては画用紙にティッシュでこすりつけたり色を混ぜたりして楽しんでいました。「Ａくんのきれい。」「ほんと、いい感じに色混ぜたね。」教師は「友達のよいところを自然にお互いに誉め合えるなんて、クラスの仲がいいんだね。」と話しました。

次第に活動が進んでいくと友達の手の上から粉を画用紙に落として手の跡を付けるなど、造形的な友達同士のやりとりも見られるようになりました。そんな中、どんどん粉をつくっていたＢさん「こんなに粉つくっちゃったけれど画用紙にくっつかないよ。もったいないな、どうしよう。」…しばらくして、隣のＣくんが不思議なそぶりをするのが見えました。よく見るとペロッとつばを指に付けて画用紙に塗り、その上に先ほどの粉をこすりつけていました。にやりとしたＣくんに「すごい発見だね。水を塗れば粉は画用紙に付くんだね。」と教師は話しました。他のグループの友達も小皿に水を入れて持って来る様子が見られました。図工の時間に子供たちは様々な試みや挑戦をしますが、その瞬間を見取り誉めることで教師も児童も心躍ります。

子供が自分のよさを実感できるような評価ができるように教師も体全体を働かせていきたいと考えます。

図工の評価で子どもの何を見るのか

はじめ	最近の図工の時間で記憶に残ったことを紹介します。活動中に子どもの何を見るか 子どもが自分で見付けたり試していることを見付け誉める。
なか１	コンテパスを使って木を校庭でかく。ある子は根っこの部分から太く書き始めた。次第に上に幹から枝へと寝転がりながら各、時々遠くに行って眺めて、紙をはりたしはりたし、「まるでいきているようだね。」「どんどんつなげて書いたので思い通りできて気持ちいい。」
なか２	２年（ぼかし遊び）子ども同士でよさを認め合っている姿を誉める。「いっぱいつくった粉がもったいない。」
まとめ	子どもがじぶんのよさを実感できるような評価をしたい

その中から最近心に残ったことを紹介します。

４年生が校庭に行き木をかいたときのことでした。Ａくんは桑の木を選び、幹や葉を触っていました。近くに寝そべりながらコンテでゆっくりと根っこの部分から描き始めました。時々遠くに行って上の方を見てました。コンテを持つ手の動きがリズミカルに動いていました。終了間際にＡくんの描いているところへ行くと幹から枝へとどんどんかき足していました。縦に横にと紙を６枚もはりたしていました。普段絵を描くのは面倒なＡくんが「のびのび描けて気持ちよかった。」とつぶやきました。

遠からずも近からず・・・

―比べてみるとみえてくる？音楽と図画工作の関係―

石 賀 直 之

３月２４日に初等中等審議会で議論されていた学習評価について報告がなされました。一足遅れで現場教員に関心の深い指導要録の改訂版が出されたことにより、学習指導要領と合わせ黄金の（？）セットが完成したと言えるでしょう。

ふたを開けてみると図画工作の文言は変わっておらず「なーんだ」と拍子抜けした先生もいらっしゃることでしょう。

図画工作は変わりませんでしたが相方（？）と目される音楽は若干の変更がなされました。「音楽的な感受や表現の工夫」が「音楽表現の創意工夫」に、「表現の技能」が「音楽表現の技能」になったのです。

各教科の評価の観点に関する考え方では、「音楽、図画工作、美術における考え方（←ひとくくりで扱われていることにも注目です。）として、

技能に関する観点と表現を創意工夫したり発想・講想したりする能力に関する観点とに分けて示すことが適当である。

と解説されています。創意工夫という文言が音楽に入ってきたのはとても大きなことだというのがわかります。つまり、技能だけでなく音楽表現のプロセスにおける生み出す力や工夫する力も重視しましょうということなのでしょう。

でもこれって図画工作では当たり前だったのではないかと思いませんか？図画工作に近づいたとうれしい反面、音楽と同じように図画工作も取り扱われてきたのかもしれません。近いようで遠く、遠いようで近い音楽との関係、改めて相対的に見てみると図画工作のもつ評価の課題も見えてくるかもしれませんね。

写真１　作品を囲んで議論する（ヘルシンキ）

汗かく評価

大 泉 義 一

今春、フィンランドで公立中学校の美術の授業を参観する機会を得ました。ちょうど題材が終了したところで、生徒が一人ずつ先生に自分の作品を見せながら、自分の表現意図や工夫したところ、困難だったことなどを語り、先生はそれに対して質問するなどして、その子の取り組みについて話し合っているところでした。その周囲には同級生がいて、口々に感想や意見を言い合い、お互いに納得のいくまで議論をしていました。（**写真１**）またこの時、生徒が自分の活動を振り返りつつ作成している『ポートフォリオ・ノート』も丁寧に読み返されていました。この『ポートフォリオ・ノート』は、生徒の自己評価がビジュアルに記されているものです。（**写真２**）

びっくりしたのは、以上のような子どもと教師による「対話」と子ども自身の「自己評価」の吟味を通して、最終的には10段階の数値による評価も行われていたことです。しかしながら、そこに至る過程において、子どもと教師との間でとことん議論が交わされ、お互いの間に「納得」が形成されていたのです。もちろんこうした取り組みは、1学級の子どもの人数が20名ほどのフィンランドだからこそ可能なのだ、とみることもできるでしょう。しかしながら、我国の“超”忙しい先生方の中にも、こうした「納得」を目指した評価活動（＝学習指導）に取り組んでいる方も、多くいらっしゃるのではないでしょうか？

評価の「真正さ」とは、教師が付けたA，B，C･･･が「第三者からみて客観的」であることよりも、「その子が納得」することを指すのでしょう。そしてそのために何よりも大切なことは、教師が子どもの活動にA，B，C･･･をつけたとしても、その数値の背後にある、豊かで奥深いその子のエピソードを語ることができるかどうか、に尽きるのでしょう。

つまるところ、子どもが育つために求められる評価とは、極めて人間的な『汗かく評価』なのではないでしょうか？

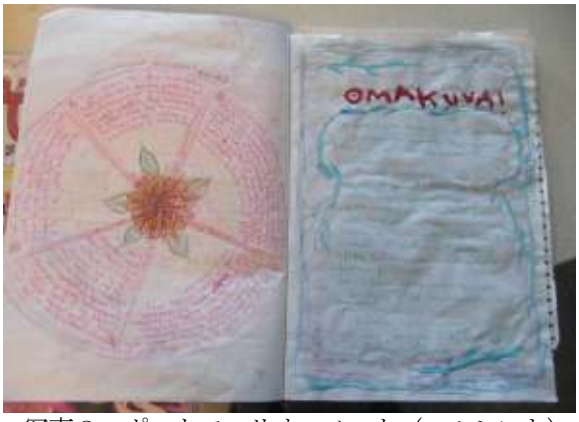

写真２　ポートフォリオ・ノート（ヘルシンキ）

「先生が見ていてくれる」と感じさせることは授業の中での大切な評価場面

北 川 智 久

私は、授業の中でよく写真を撮る。撮影するのは結果的な完成作品の記録ばかりではない。子どもの目線や手の動き、子どもどうしのかかわり合いなどの場面に出会うと、デジカメでパチリと撮影する。

活動の序盤にしていた活動が少しずつ変容を見せ、新しい発想を加えたり、創造的な技能を働かせたりしながら進んでいく。困ったことを相談に来る子どもの手元をパチリ。「いいねえ」などと声を掛けながらパチリ。個別に回りきれない時には、広い範囲で数人を撮影しておくだけでもよい記録となる。これらは、結果としての作品だけでなく、活動の過程を含めた評価・評定にも役立つ事となる。しかし、それだけではない。

子どもたちの側から見ると、活動の過程を撮影されることはどのような意味を持つだろう。先生がパチリとシャッターを切る時、子どもたちは、「あっ、先生が見ていてくれる」と感じるはずだ。私は子どもたちに、「これからどうなるか楽しみ」「工夫しようという態度がいいね」などと語りかけるようにしている。最終的な活動の終末には結びつかないような工夫もなるべく拾い上げてあげることで、子どもたちが安心して試行錯誤できるようにしてあげたいと考えている。

以前、当研究会の石賀先生が造形遊びの授業のビデオを見せてくださった。撮影者は授業者の石賀先生本人。石賀先生は、撮影中は終始無言。天窓から差し込む日差しとビニル傘の組み合わせの美しさをたのしむ子どもたちのすばらしい活動が映っている。「僕は何も指導しなかった」と石賀先生は話された。私は、先生が撮影している眼差し自体が「先生が僕達の活動を見ていてくれる」と子どもたちを後押ししたのだと思った。撮ること自体も重要な評価方法である。

子どもを育てる評価

桐 山 卓 也

図工の時間、子供達をどう評価するか。子供達の何を見て評価したらよいのか。その答えは、子供達の何を育てたいかを明確にする事で見えてくると思います。

私が造形活動を通して１番大切にしている事は、子供達が「こんな事をやりたい、やってみたい。」という気持ちを持つということです。どの教科もそうですが、こうした主体性こそが、多くの学びを得られる重要な要素だと考えています。そして、子供達は「やりたい事」に向けて、試行錯誤を繰り返していくのです。材料の獲得や自分のイメージに近づけるための努力等、様々な経験を積み、学んでいきます。また、自らの想いに向けての活動なので、心の充実感も含めた喜びを得る事ができるのです。私は、図工の時間で、この様に学べる子供を育てたいと思っています。

個人的な考えですが、十数年前までは、図工の時間においても、絵でも工作でも、お手本どおりにきちんとできていればそれでよかったのだと思います。与えられた事をきちんとこなせるスキルが、社会に出てからも要求されていたからです。例えば、工場等できちんとした製品をしっかりつくる事が立派な仕事となり得ていたのです。ところが、昨今そうした仕事の多くは機械にとって代わられてしまい、多くの方が職を失う事になっています。つまり、作品の完成度とかは、現代社会において、さほど重要ではなくなってきているのです。

そうした事も考え合わせ「やりたい事を見つけられ、活動の中から発見や学びを得られる。また、その事に喜びを感じられる子供」に育つ事が、現代社会では重要ではないかと考えています。そして、こうした子供達の活動に目を向け見とり評価する事が、子供の育ちにつながると思います。

紙面では、多くを語れませんが、夏の研究会で、この辺りの事を、皆さんと考えていけたらと思います。

評価をする楽しさ

中 村 哲 夫

児童が表現した作品を見て、ともすれば「ランクづけ」「優劣づけ」をしたくなりがちです。

じっくりと見つめていくと、その児童の顔と学習中の姿が見えてきます。「熱中して表現していたね！」「失敗を乗り越えて、よくぞここまでがんばったね！」など、など、この子のよいところ、よかったところを探してやるぞと決意して見つめてみませんか。

「子どもの姿」について

橋 本 光 明

サブテーマ「図工の評価で子どもの姿の何をみるのか」から抜き出した「子どもの姿」についてふれてみたい。最初に思い出すのは 10 年程前の管理職の集まりである。「子どもの姿から何らかの情報や資料を得ることで、教師は子どもに対して何を為し得たのかについて自らを厳しく見つめなければならない。それが評価の基本である。」との発言があった。これに対して「子どもの姿を見る前に何をどう押え、どのように指導するのか」を明確にすることが先決との意見が出た。

ニワトリが先か卵が先かに似た論議であるが、最終的には「確かな計画」「的確な指導」「公正な評価」の循環でまとめられた。歴史的にみるとこの３つが、別々に強調されてきた。目標論が浮上したり、内容・方法論に花が咲いたり、評価論に集中したりした。現在は「生きる力」の下で自前のカリキュラム論を唱える時代である。そこで求められることは、①学習目標・内容の改善、②学習内容の確実な定着を図るきめの細かい指導、③その実現状況の評価である。

すなわち、ここでの「子どもの姿」は、「何をみるか」との関連で③の図画工作学習の実現状況をみる（評価する）こととなる。これを前提にすると「子どもの姿」とは、a「関心・意欲・態度」の姿であり、b「思考力・判断力・表現力」が発揮されている姿であり、c「知識・技能」を身に付け、生かされている姿となる。

もう一つ押えておくことは、「子どもの姿」には２つの捉え方があり、１つは学級における一人ひとりの子どもの姿であり、もう一つは学級の集団との関連からの子どもの姿である。サブテーマからは個々の子どもの姿に向かう傾向にあるが、一人の子どもと学級集団とは密接にかかわっている。一人ひとりの子どもの姿をみて得られた情報や資料は、学級としての集団の学習の姿を理解する情報や資料としての価値をもっている。このことを忘れずに指導・評価に当たりたい。

「評価」は授業の「主眼～目標」と表裏一体

林　耕 史

「子どもたちが思い思いの表現をして、活動の姿も出来上がった作品もまちまちな時、どう評価したらよいのですか？」･･･このような質問をされることがあります。とりわけ、出来上がった作品が子どもによって千差万別の場合についてです。

「同じ授業」をしているにもかかわらず、「できた作品」が違うとなると、どのように評価すればよいのか判然としないし、そのような授業ではいけないのではないか、ということのようです。

しかしながら、ここには重大な「授業観の欠如」があると思います。図工の授業は単なる「刺激―反応」の形態をもって共通均質の結果を求めるものではないのです。「全員が同じような絵が描けるようにする」という願いをもってメソッドに頼る授業をする先生がいますが、それは決して図画工作科が求めている授業とはいえません。

私たちが腐心しなければならないのは、子どもが自らの思考と価値判断に基づいて試行錯誤をしながら自分の方法で道筋をつけていく自己実現の力を育む授業を創ることです。ですから、「どのような子どもに育てたいのか」教師が明確なビジョンをもち、その観点で子どもの姿を評価することが必要であり、その願いに立脚した授業づくりをめざすのが、図工における授業観だと思います。

冒頭の質問をしてきた先生には、「あなたはどのような子どもに育って欲しいと思って、その授業をなさったのですか？それに基づいて子どもの姿を見れば、評価規準は自ずと見えてくるはずです。」とお答えしています。「評価」は、授業の「主眼～目的」の裏返しですから。

幼保小連携に思う

平 田 智 久

２年前に学習指導要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針の３つが改訂され同時に告示された。このことは歴史的にも初めてのことである。

その中に共通しているのは「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」ということである。

その幼稚園教育要領や保育所保育指針は“～味わう”“感じる”などの方向づけを重視した「方向目標」であり、学習指導要領は“できるようにする”といった目標への到達度を重視した「到達目標」である。そうした教育の方向性が異なっている中で「円滑な接続」といっても不可能に近い。

到達目標に慣れている小学校教員の目から幼児教育を眺めれば「活動の方向やその適切な指導法がみえない」という批判になるのだろう。逆に幼稚園や保育園の保育者達が小学校をみると「子どもの興味関心に関係なく、〇〇させるっておかしい、子どもに無理」と怒り心頭である。

そうした教育課程上の違いを明らかにしながら具体的な接続を模索していく時、小学校のさまざまな教科の中で「図画工作」の学習指導要領は「到達目標」というより「方向目標」に近い気がする。その意味で幼児期と児童期の研究こそ（この児童造形教育研究会こそ）重要に思えてならない。

さらに言えば幼児期の「総合的な指導」という教育課程の根幹は、他の領域（ことば・健康・人間関係・環境）と結び付けていくには「表現」という視座が総合的な役割を担っていることである。

このことからも「図工と表現」の有機的な関係性、接続を研究していくことは“生き生きとした、生きる力のある、人間性を育てる”ことである。

極論すれば「図画工作」は教科の一つではなく、さまざまな教科のベースとなる教科、つまり基礎教科としての意味合いが強いのではないだろうか。作品主義の図工ではなく、人間として育つための図工であってほしいと願っている。

活動の「途中」の評価に慣れると気が楽です

堀 井 武 彦

評価についての言説は数々目にされていらっしゃると思います。「活動の結果ではなくて過程を大切に」
「作品主義で子どもの活動を評価してはいけない」
「評価は評定ではなく子どもの活動を励ますもの」
「評価は教師の支援のあり方の評価でもある」・・・etc

理念はごもっともだけれど、実際にどうすればいいの？というのが正直なところだと思います。

そこで、活動の「途中」で評価することをお薦めします。図工は２時間続きが基本です。２時間で終わる題材でも、特に造形遊びのような活動はなおさらのこと、児童の活動を記録用紙を持って、（上級編としてはデジカメかビデオを首からぶら下げて全体を眺めましょう。）題材のめあてに沿って児童が活動していれば「おおむね達成している＝B」なわけです。めあてに沿ってというのは活動の傾向や密度を読み取ることではありません。児童一人一人が自分らしく活動していることが大切。時間短縮のためにも○やレの印。目に留まった時だけ「ユーモア◎」がメモできたら上級者。実際授業では「○○くんがセロテープ貸してくれませーん！」とかいろいろな対応に追われるのが現実。だから、最初に活動が停滞している児童の支援を第一に。その児童の活動が再開したら○。

さて、「よくできる＝A」をどうするか？です。でも、小学校の先生は基本的に学級担任。あらゆる教科や活動を通して児童を観察しているはず。ここで参考にするのがまず自分の記憶。次に、メモ、写真や映像、そして作品。でも、記録資料を「評定」しないように。あくまでも授業のふりかえりと次の活動の支援のため総括が評価であるという姿勢を大切に。おっと、紙面がなくなりました。この先は、夏の実技研修会で。

児造研のホームページもご覧ください ！

今年の研究集会のご案内や，これまでの研究の様子など，ご覧になれます。「児造研」で検索！

http://www.geocities.jp/jizouken/index.html